

「帰国・外国人児童生徒と共に進める教育の国際化推進地域」中間報告書 神戸市

1 帰国・外国人児童生徒と共に進める教育の国際化推進地域の概要

平成14年9月1日現在の推進地域内の児童生徒数

ア 海外帰国児童生徒(海外に1年以上在留)在籍数

小学校		中学校		盲・養護学校		計	
児童数	学校数	生徒数	学校数	児童生徒数	学校数	児童生徒数	学校数
587	96	332	56	2	2	921	154

イ 中国等帰国児童生徒数

小学校		中学校		計	
児童数	学校数	生徒数	学校数	児童生徒数	学校数
37	9	20	2	57	11

ウ 日本語指導が必要な外国人児童生徒数

小学校		中学校		養護学校		計	
児童数	学校数	生徒数	学校数	児童生徒数	学校数	児童生徒数	学校数
130	33	39	17	1	1	170	51

推進地域の特色

明治維新以来国際化を図るなかで発展を遂げてきた本市は、貿易関係に係る欧米諸国の外国人の居留をはじめ、多数の在日韓国・朝鮮人、中国人等の居住が定着し、国際色豊かな神戸の文化を築いてきた。

近年は、これらの外国人に加えて、中国帰国者、ベトナム難民、さらには平成2年の入管法改正以来、就労を目的として本市に来る中国、韓国、ブラジル、ペルー等の外国人が増加し、定住傾向にある。平成14年11月現在、112カ国、44,817人の外国人が居住している。また、親の留学や国際結婚により来神する児童生徒も多いので、市内全域にわたって時期、年齢を問わずこれらの児童生徒が編入学をしてくる傾向が顕著である。

また、本市には海外勤務経験者も多く、海外に1年以上在留した経験をもつ児童生徒は、公立学校だけで921人、154校に在籍している(滞在先：45カ国)。

したがって、このような様々な文化背景を持つ帰国・外国人児童生徒が他の児童生徒と共に学ぶことができるように、どの学校でも円滑な受け入れができる体制の整備・充実と、一人ひとりに応じたきめこまやかな温かい配慮が求められている。

帰国・外国人児童生徒の実態(学校生活への適応状況、日本語能力の程度等)

ア 全市校長会での説明や神戸市総合教育センター発行の情報誌「教育展望」での支援施策紹介等で意識啓発に努めた結果、外国人児童生徒等受け入れ時の初期対応が、全市どの地域の学校でも、円滑にできるようになってきている。

イ 教育委員会と研究協議会で作成した以下の指導資料等により、受け入れ校を支援している。平成13年度からは、これらを教育委員会のイントラネットに掲載し、必要に応じ、すぐに取り出せるようにした。学校の受け入れ体制の整備、保護者の学校理解に役立ち、児童生徒の

学校適応に役立っている。

「来日外国人児童生徒受入れの手引き」(教師用指導資料)

「ようこそ神戸の小学校へ」(保護者用学校説明資料)

「ようこそ神戸の中学校へ」(保護者用学校説明資料)

「学校生活ガイドブック」〔平成14年度改訂〕(行事等の説明、家庭への各種連絡文書類)

は、6言語(中国語、ベトナム語、ポルトガル語、スペイン語、韓国・朝鮮語、英語)に対訳

ウ 受入れ校支援のために、母語を解するボランティアを派遣している。初期対応の期間を6カ月程度とし、指導補助のボランティアを36回派遣しているが、その後も必要に応じて継続派遣をしている。保護者の教育的関心の違い等の理由で欠席が多い児童生徒もボランティアの訪問日は登校し、母語で話すことにより、ストレスの解消や心の問題の相談もできるため、より円滑な学校適応につながっている。

エ ボランティア確保が難しいベトナム語、ポルトガル語を中心に、兵庫県が緊急地域雇用創出特別交付金で採用した子ども多文化共生サポーターの派遣を受け、外国人児童生徒の指導の補助や心のケアにあたりると共に、学校全体の多文化共生教育を支援している。これにより、外国人児童生徒と、その他の児童生徒との相互理解が深まっている。(期間：平成14年4月～平成17年3月予定)

オ 初めて日本語指導が必要な外国人児童生徒等を受入れる学校には、総合教育センター担当者が学校訪問し、初期対応や指導体制づくり、日本語指導等について助言や相談対応をしているので、初期の適応状況は概ね良好である。また、学校訪問時、初期の日本語指導教材推薦リストを紹介し、利用を促している。また、総合教育センターで、教材の収集・展示・貸出を行っている。

カ 初期対応の6カ月間で、日常生活に必要な程度の日本語は、「聞く」「話す」領域で進歩が見られる。しかし、「読む」「書く」領域は難しく、長期間の継続的・系統的な指導が必要である。さらに、教科学習では学習言語の習得が困難で、特に加配教員が配置されていない学校では、学習言語を指導する時間が十分に確保できず、教科学習への適応という難題を抱えている。その他の学習言語の指導のあり方の研究・研修の充実やカリキュラム開発が課題である。

キ 中学生で来日する事例が増加し、卒業後も日本での進路選択を希望する生徒が多くなっているが、国語や社会(特に日本史)、理科の学習に必要な日本語能力まで指導することは非常に困難な状況で、生徒・保護者だけでなく、受入れ校にとっても進路指導は大変深刻な問題である。

2. 帰国・外国人児童生徒と共に進める教育の国際化推進地域センター - 校の概要

(1) 神戸市立こうべ小学校

学校の概要

- ・ 学校名 神戸市立こうべ小学校
- ・ 校長名 橋 本 尋
- ・ 所在地 神戸市中央区中山手通4丁目23-2
- ・ 学校規模 学級数(全17学級、うち障害児学級1、児童数521)
- ・ 電話等 TEL:(078)221-2539 ・ FAX:(078)221-0218
- ・ 交通 JR・阪神元町駅北へ800m・市営地下鉄県庁前駅北へ200m

センター校での通級児童生徒数

センター校以外からの通級児童生徒は現在いないが、センター校在籍で日本語指導を必要とする児童18名のうち9名は、校区外からの指定外通学者である。日本語指導を必要とする帰国・来日外国人児童の母語は、中国語・ウクライナ語・アラビア語・インドネシア語・英語の5言語にわたる。また、クラスには、来日外国人児童を始め、帰国や国際結婚等で指導を必要とする児童も全児童数の約1割以上在籍し、多様性に富んでいることが特徴として挙げられる。

平成14年度 センター校での指導内容

- ア 中国語を母語とする児童が全体の7割強、残りの3割弱はインドネシア語、英語、アラビア語、ウクライナ語を母語とする児童である。
- イ 指導内容は、それぞれの児童の日本語理解の程度に応じた学年の教科書を使用した教科指導。特に国語のひらがな、カタカナ、漢字の読み書き指導や日記指導が中心となっている。

センター校を中心とする帰国・外国人児童生徒指導協力体制について

- ア 神戸市国際教育研究協議会の設置に伴い、庶務として、毎月定例会に参加し地域内の日本語指導推進協力校、研究協力校と連携しながら研究に取り組んだ。
- イ 推進地域内外からの依頼に応じて、指導体制づくり、児童の実態に応じた学習面・生活面での適応指導、及び日本語指導方法等について、助言及び必要な資料や情報を提供した。
- ウ 本年度の[国際教育]に関わる取組を研究紀要にまとめ、次年度への研究の足掛りとし、また他の教育機関へ情報提供できるよう準備している。(平成15年3月15日発刊予定)
- エ 推進地域内・及び兵庫県内外・海外の教育機関からも学校訪問を積極的に受入れ、[国際教育]に関して研究交流(一般クラスと国際教室の授業参観と研究協議)

を行った。

(2) 神戸市立神戸生田中学校

学校の概要

- ・校長名 永海 勝
- ・所在地 神戸市中央区北長狭通4丁目10-1
- ・学校規模 学級数(全13学級、うち障害児学級1、生徒数402)
- ・電話等 TEL:(078)334 1850・FAX:(078)334-1851
- ・交通 JR・阪神元町駅西口北側100m

センター校での通級児童生徒数

センター校以外からの通級児童生徒は現在いないが、センター校在籍で日本語指導を必要とする生徒は9人である。

来年度は近隣校からの受入れを行う、日本語指導教室(仮称)の開設を検討している。

平成14年度 センター校での指導内容

- ア 日本語指導を必要とする生徒9名の母語はいずれも中国語。
- イ 週2回、各2時間、主に中国の高等学校の日本語テキストとテープを使用した日本語指導。
- ウ 簡単な英語・数学の問題集を使った教科指導。
- エ 小学校用書き取りプリントを使用した単語・語彙指導。

センター校を中心とする帰国・外国人児童生徒指導協力体制について

- ア センター校として毎月1回国際教育研究協議会の指定を受けた学校(本校と小学校のセンター校1校、日本語指導推進協力校3校、研究協力校9校)の国際教育主担者を集め、テーマを決めて研究協議を行った。
- イ 文化祭で、姉妹校提携をしている広東実験中学校との交流を掲示物やパソコンのプレゼンテーションソフトを使用して紹介したり、中国文化の紹介(漢字・遊び・料理・服装等)を実演を介して行ったりして、本校生はもとより近隣地区の住民の参加を得て、広く知っていただく機会とした。
- ウ 国際教育に関して経験の少ない中学校現場の悩みや指導法を情報交換し、それに関して小学校からアドバイスを受け、中学校における日本語指導を必要とする生徒に対しての指導に役立つよう実践研究を行った(日記指導など)。
- エ 子ども多文化共生サポーターの活用のしかたについて協議し、日本語理解が不十分な児童生徒に対してより有効に活動してもらえるようにした。
- オ 地域にある韓国学院から講師を招き、韓国の歴史や風土・文化・音楽について講話や実演をしてもらったり、「こうべまつり」のサンバパレードに参加するために専門の指導者に来てもらい、簡単な楽器の練習をしたりして、外国の文化に積極的に触れさせ国際感覚を養わせた。

3. 帰国・外国人児童生徒と共に進める教育の国際化推進体制の整備

国際教育研究協議会の概要

ア 構成員

センター校・日本語指導推進協力校・研究協力校の校長及び担当教諭、
教育委員会指導課、総合教育センター、
神戸市小・中学校教育研究会国際理解教育部長(学校長)

イ 活動状況

外国人児童生徒等の受入体制の整備充実及び学習支援

- ・ 日本語指導、特に授業理解のための学習言語指導のあり方の研究
- ・ 小・中連携による進路を見据えた長期的指導のあり方の研究
- ・ 手引き・指導資料等の継続的な検討・改訂
- ・ 支援ボランティア等及び教育相談事業の充実

帰国・外国人児童生徒とその他の児童生徒との相互啓発を通じた国際教育の推進

- ・ 実践研究を通して、指導カリキュラム試案の作成
- ・ 地域に居住する外国人、ボランティア等の人材活用のあり方の研究及び地域と連携した教育活動の推進

ウ 協議会設置の効果

- ・ 帰国・外国人児童生徒の受入れ体制、日本語指導、学習支援や在籍クラスにおける相互啓発のあり方などについての情報交換を具体的事例に基づいて行うことができ、彼らの多様な実態を把握することができた。それに伴い、現在課題になっていることの解決方法となるヒントや、今後取り組まなければならない課題を明確に共通理解することができた。
- ・ 協議会で作成した指導資料・説明資料やセンター校等で開発した資料・教材・実践事例を提供することにより、その他の学校での初期体制づくりや日本語指導に対する意識を啓発でき、帰国・外国人児童生徒に対する初期対応が、円滑にできるようになってきた。
- ・ 小学校と中学校の連携をいかに図っていくかということについて、今までにない視点から協議し、一定の成果を得られると共に、今後の課題が明確になった。

加配教員の活用状況

ア 帰国・外国人児童生徒教育推進のための研究、教材、資料等の作成。

イ 他校の帰国・外国人児童生徒教育に対する支援、助言、資料提供等。

ウ センター校在籍児童生徒の指導。

教育相談員の派遣状況及びその効果

ア 外国人児童生徒受入校支援ボランティア派遣事業（平成15年2月末現在10言語、延43校に派遣：小学校30校・中学校13校）

イ 子ども多文化共生サポーターの派遣（平成14年4月～平成17年3月予定）（平成14年10月現在、4言語、延18校に派遣：小学校12校・中学校6校）

ウ 学校訪問による教育相談（平成15年2月末現在18校を訪問：小学校12校・中学校6校）

エ 児童生徒と母語で話すことにより、ストレスを解消したり、悩みを聞いて状況を把握し、担任や保護者に連絡したりすることができた。

オ 学校と保護者との通訳・翻訳活動により諸連絡がよく伝わり、学校への信頼が高まった。これにより、児童生徒の指導がより円滑に行えるようになっている。

4. 平成14年度の具体的な取組内容と成果等

研究主題

「地球時代を共に生きる心豊かな児童生徒の育成」

主題によせて

神戸市の小・中学校に学ぶ帰国児童生徒は、平成14年9月1日現在で978人、また、日本語指導が必要な外国人児童生徒は170人に上り、母語は、中国語、ベトナム語、韓国・朝鮮語、スペイン語、ポルトガル語等と、多様な言語にわたっている。

神戸は、明治の開港以来、異文化とのふれあいから国際色豊かな美しい街へと発展してきたが、ますますのボーダレスの時代を迎え、今後は今までも増して上記のような異なった文化、言語、人種、宗教等、或いはそれらに属する児童生徒の多様性を豊かさとして受け入れ、「共に生きる」ことを学び、共に人間として尊重、啓発しあいながら成長することを目指したい。

研究主題に関連した活動及びその成果

ア 本年度の活動方針について

- ・ まず、各校の現状を報告し合い、その中から課題を見出し、それについての各校の取り組みや解決方法を各月毎に協議していくこととした。

イ 研究テーマの検討

- ・ 「地球時代を共に生きる心豊かな児童生徒の育成」に決定した。

ウ 各校の現状の報告をもとに決定した協議のための課題

- ・ 学習支援 ・外国人児童生徒受入校支援ボランティア、多文化共生サポーターの活用
- ・ 学習支援を支える仲間づくり、相互信頼 ・在籍クラスにおける指導
- ・ 評価、保護者との意思疎通

推進地域としての取組み及びその成果

ア 国際理解教育推進事業の実施

センター校...こうべ小学校・神戸生田中学校 日本語指導推進協力校...本山第二小学校・港島小学校 研究協力校...東灘小学校本庄小学校
--

- ・ 以上の学校で講師を招いて「国際理解教育推進事業」を実施し、帰国・外国人児童生徒とその他の児童生徒との相互啓発を通じた国際理解教育の研究・実践、並びに様々な国籍や文化を持つ外国人児童生徒等の多様性を受け入れる素地づくりの実践を行った。
- ・ 帰国・外国人児童生徒と共に進める教育の国際化推進地域事業の啓発に努めた成果として、全市の小中学校長に事業目的や内容が理解されるようになり、どの学校も初期対応が円滑にできるようになってきた。

イ 中国語素養維持教室「ふれあいタイム」の実施

- ・ 中国帰国児童が多数在籍する神楽台小学校において、中国帰国児童の日本の学校生活への円滑な適応、自己の確立、並びに異文化を尊重する態度の育成を目的とし、母語の学習、日・中文化に親しむ活動、遊びやゲームを通じた交流も内容として取り入れながら、学校生活で好ましい人間関係を築けるような学習を「ふれあいタイム」として研究・実践した。

ウ 学校への支援策

- ・ 外国人児童生徒受入校支援ボランティアの派遣(上述)
- ・ 子ども多文化共生サポーターの派遣(上述)
- ・ 学校訪問による教育相談(上述)

特に、受入れ校への訪問相談等の活動で、児童生徒理解のための学校体制づくりや教材資料等の助言をすることで、受入れ校が積極的に対応するようになってきている。

エ 研修の実施

日本語指導講座

演 題：普通学級でできる日本語指導の工夫

ニューカマー児童生徒のための理論と実践

内 容：実践体験発表と交流

・この講座の実施により、日本語指導に対する関心を持つ教員が増加してきた。また、日本語指導を要する外国人児童生徒への理解も深まった。この講座へは、支援ボランティア、子ども多文化共生サポーターにも参加を呼びかけ、研修の機会としている。

国際教育研修会【平成14年度～実施】

演 題：来日間もない児童生徒の受入れと支援

ソフトランディングのできる学校環境づくり

・この研修会の実施により、担当教員にいつこの学校へ外国人児童生徒がやってきても、温かい支援と受入れができるようになるという環境作りの意識を広めることができた。

オ 各種手引き等の更新・イントラネットでの提供

来日外国人児童生徒受入れの手引き（教師用）

学校生活ガイドブック（保護者説明用：6言語）【平成14年度更新】

ようこそ 神戸の小学校へ、

ようこそ 神戸の中学校へ（保護者説明用：各6言語）

・どの学校でも、いつでも上記内容を取り出せることにより、安心感をもつことができると同時に、機敏に対応できるようになった。

カ 日本語指導教材の提供

初期日本語指導教材の収集・貸出・展示

「学校リビングガイド - 日本語会話編」(児童生徒用：6言語)

6言語：英語、中国語、韓国・朝鮮語、ベトナム語、ポルトガル語、スペイン語

・なかなか学校独自では見出せない上記教材を一同に集め展示・貸出することにより、児童生徒の実情に合わせた教材を適切に与えることができるので、一人ひとりに丁寧に対応できるようになり、成果も向上しつつある。平成14年度は、他都市の作成した翻訳教材について、了解を得て、貸出・展示教材に加えた。

キ 「こうべ地球っ子プログラム」の実施

- ・ 全小学校において、外国人講師を招き、各校の実態に応じた体験学習や交流活動を通

して国際理解教育を推進した。帰国・外国人児童に焦点を当てた学習・活動にも活用。(1校あたり平均15時間。全2550時間実施予定)

帰国・外国人児童生徒とその他の児童生徒の相互啓発の観点による取組及びその成果

ア 取組

・ 上記のアに記載した学校による「国際教育推進事業」、並びに「こうべ地球っ子プログラム」において、次のような取組が行われた。

例1：帰国・外国人児童生徒の保護者を講師としてクラス、学校に招き、授業をしてもらう。その児童生徒が暮らしてきた国、文化、風習等を直接保護者から語ってもらい、時には当該児童生徒に質問をして答えさせたり、或いは説明をさせたりして活躍の場を与える。

例2：外国人児童生徒の出身国の方を講師としてクラス、学校に招き、その国の言葉のみで授業をしてもらう、或いは、その国にクラス全員が行ったと仮定し、その国の学校に外国人として入学し、必要な書類を書かせる等の場面を作ったりする中で、当該児童生徒に随所で通訳をさせるなど、活躍の場を与える。

例3：実際に交流のある外国人学校に1日体験入学をし、1日中その国の言葉だけの授業の中で過ごす。

イ 成果

- ・ 当該外国人児童生徒は、自らが生き生きと活躍する場を与えられたことにより、自己存在感を大きくし、アイデンティティを持つことができ、クラス、学年、学校の中に心の居場所ができた。
- ・ 他の児童生徒は、外国語を自由に話す当該外国人児童生徒を目の当たりにすることにより、その姿に感動すると同時に、自分自身が全く言葉が分からない環境の中での心細さを実感することを通して、一生懸命に日本語を習得しようとする普通の当該外国人児童生徒の努力に敬意を払い、できる限りの支援をしていこうとする気持ちを強く持つようになった。
- ・ お互いの文化が持つ違いをそれぞれの豊かさとして実感し、それを当たり前のことと認識した上で、共に地球で生きる人間として尊重しあう意識と態度が培われてきた。

地域と連携した活動（民間企業、地域の人材の活用状況等）及びその効果

「こうべ子どもにこにこ会」との連携

ア 取組

・ 神戸市東灘区、灘区での外国人の子どもたちに、学習支援、相談や地域との交流の場の提供を行う地域ボランティアグループ「こうべ子どもにこにこ会」が運営する母語支援教室（ポルトガル語・スペイン語）の運営を支援した。（講師謝金・活動場所の提供）

イ 成果

・ 教育委員会、学校、地域の3者が連携を深め、いずれの学校にも就学していない児童生徒を含めた、外国人児童生徒に対する教育の新たな展開の足がかりになった。

連携した団体等の概要

兵庫日本語ボランティアネットワーク内「こうべ子どもにこにこ会」

ア 設立趣旨

・ 日本語が不十分であるために、教科学習についていけなかったり、文化の違いにより、学校生活になじめなかったりして、学校を長期に欠席する外国人児童生徒や、小中学校への就

学年齢に達しているにもかかわらず、未就学のまま自宅で何もしないで過ごしている、行き場のない孤立した外国人児童生徒のために、これらの児童生徒が安心して学べる場所を作り、日本語学習、母語学習、相談、交流、研修活動などの場とする。

イ 活動内容

日本語・教科学習・母語学習支援

- ・ 児童生徒数...約30名
- その他
 - ・ 地域学校との文化交流
 - ・ 子どものことを考えるための研修会
 - ・ 子ども支援のための書籍、資料の収集

その他特筆すべき平成14年度の成果と課題

- ・ 平成14年度の活動内容について、冊子にまとめ、全校に配布する。

平成15年度の課題及び事業計画概要

ア 課題

- ・ 帰国・外国人児童生徒一人ひとりの実態も、受入れ校の状況も非常に多様である。帰国・外国人児童生徒それぞれがもつ多様性を豊かさとして伸ばし、より一層充実した学校生活を送れるような学校体制づくりを、全市的な視野でさらに推進していきたい。それが、その他の児童生徒にとっても、今日的課題の「国際性を育てる教育」、「多文化共生と人権教育」へとつながっていくことを確信している。
- ・ 中でも、外国人児童生徒の学習適応には大きな壁がある。長期滞在、定住を目指す傾向が強くなっていく中で、将来の進路をも見通した学習支援、学力保障が求められている。

イ 事業計画概要

- ・ 日本語指導、特に授業理解のための学習言語の指導のあり方と、カリキュラム試案作成の研究
- ・ 小・中連携の具体的な方法、特に進路を見据えた長期的指導のあり方の研究
- ・ 手引き・指導資料等の継続的な検討・改訂
- ・ 支援ボランティア等及び教育相談事業の充実
- ・ 帰国・外国人児童生徒と他の児童生徒とのさらなる相互啓発を通じた国際教育の推進